

レコード軽術

4.1
2 0 1 4
No.52

Artist
of the
Month

マモル・サムラガワ

Mamoru Samuragawa

偏狭な視野といわれようと
美しい国を愛せと押し付け
熱き国粹主義、いざ世界へ

【特集】

「日本の指揮者」
を聴こう

——駄演、凡演&珍演コレクション

古田秀和「之も楽しむ者に如かず」



夢と情熱、華やかな舞踏会、一転、遠雷が断頭台へ導く



人生のドラマを音楽を聴きながら
ヘッド・マウント・ディスプレイ
による仮想現実で味わいましょう。

画像は別売りのUSBメモリにて提供。続々発売中。



守の逃亡 18 年



春子のはいた
ガラスの靴



直樹の誤算



熊手に隠れた喜美

大事な時に転んでも大丈夫



ラフマニノフのピアノ協奏曲第2番を含むCD（演奏者問わず）を買ったら背ラベルを送って下さい。
抽選で元気の出る飴5種のセットをさしあげます。



マモル・サムラガワ氏 記者会見



真実を著者に
迫る一問一答

19世紀末から20世紀前半にかけて活躍した大ヴァイオリニストであるフリッツ・クライスラーは埋もれていた曲を発掘し、自身の演奏会で「埋もれていた名曲の編曲」として紹介することを楽しみにしていた。しかし、その楽しみが行き過ぎて、その作曲家の雰囲気はあるものの、実際はクライスラー自身の作である曲をいくつも作った。ヴィヴァルディ、ボッケリーニ、クープラン、さらにバッハも作曲家としてプログラムに並んだ。ところが、オリジナルの存在を問われたことがきっかけで自身の作品と認めるに至った。1935年のことである。

クライスラーは大作曲家の作品を自分が作ったとして発表するのではなく、大作曲家の作品に聞こえるほどの作品を生み出し

てしまったのだ。剽窃を超えた才能がなければ出来ないことであり、このような能力に恵まれたからこそ名演奏家になれたと思わざるを得ない。

しかし、自作であることを認めるにあたって逡巡はいろいろあったようで、そのようすは近年発見されたという本人および友人たちの書簡などから明らかになってきた。話題になったのはドイツで発行されたマモル・サムラガワという日本人のフリーライターが書いた「ゴーストとの30年」という本である。発行以後売れ行きは順調だったが、いくつかの疑問点が指摘され、著者の記者会見がミュンヘンのホテルで行われた。会場に集まったのはほとんどが日本人記者だ。

——私が最も感銘を受けたのは偽作告白に至るまでのクライスラーの心理描写です。サムラガワ（以下Sと略す）ありがとうございます。ざいます。一番力を入れたのはそこです。

——こんなことを続けていって良いのだろうか、ばれたあとはどうしたら良いだろうか、焦りと恐怖が入り交じった日々の心情が生々しく伝わってきます。まさに、当事者のみが体験できる世界というべきでしょう。参考にされたのはどのような文献ですか？

S 申し訳ありませんが、提供者との約束で明らかには出来ません。
（ドイツ人記者があなたの創作ではないかというような質問をするが、S氏は隣の女性に通訳をしてもらい答える）

S 日本語版ではやや脚色が入ったかも知れませんが、オリジナルに忠実になるよう心がけました。

— あなた、今通訳を通じて答えています
が、ドイツ語の読み書きは出来ますか？文
献調査には不可欠でしょうに。

S 私は耳が不自由だったことがあり、会
話は苦手なのです。すみません。

— 日本で「現代のベートーヴェン」と言
われた人のことを知っていますか？

S 知っています。

— 彼がNHKの取材を受けた時（編注：13
年3月）どちらにいましたか？

S ドイツにいたに決まっているさ。言っ
とくが君たち、どうして話を捏造の方向へ
と進めるのか。そうして得た記者会見の記

録も君らの捏造だ。世の中、面白いものを
書いて食ってて何が悪い、君らも、君らが
書いたのを面白がって読む読者も同罪だよ。

そう言つて彼は会場から出て行つた。





古田秀和

Hidekazu FURUTA

之も楽しむ者に如かず

● 評論と文化の継承

前夜の嵐が嘘のように晴れ渡った。桜は満開。風もなく、もったいないような花見日和になった。長い間聞いてなかった小鳥のさえずりが舞い上がった降りてきたりして——あたかも、ここが聴かせどころよと誇らしげに歌うオペラ歌手のように——春の日差しがさらに輝きを増す。なおも耳を澄ますと、聞こえてくるのはピアノの音色。そのピアノのある家では春休みに入った小学生在弾いているのではないだろうか。

私たちは鳥のように羽を持つていないから、「飛べたらしいな」といくら思っても真似をすることは出来ない。それどころか、飛んでいる時の鳥の気持ちさえも本当はわからない。しかし、ピアノを弾いている人を見たら、

——ピアノでもテニスでも木登りでもいいのだけれど始めは当然下手くそだけれど真似をすることができる。最近の脳科学の研究によれば、仲間がある動作をするのを見ると、自分の脳においてもその動作に対応する神経細胞が活性化されるのだそうだ。動物はこの能力を持つているゆえ、子どもは親のなすことを模倣し、熟練していくことによって狩りや食物の採集の技術を代々伝えていくことが出来るのだ。

しかし、チンパンジーやボノボのような知能の高い霊長類であっても、親が子どもに手を取って教えるということはない。いわんや教育のカリキュラムも組織もない。いわれなくても親の真似が出来るようになることが

子孫が生存競争に残る条件なのだ。一方、子どもが親の真似が出来るまで待つより教育するという方法をとれば技術の継承が格段に効率的になることは明らかだろう。我々人類の文明の発達を語る上で子孫を教育するという行為の登場は革命的といえるのではあるまいか。

もちろん、ピアノをうまく弾くのは木登りよりずっと難しい。さらに問題を複雑にしているのが、芸術の表現に関しては目標が明確ではないことだ。達成度は数値では示されない。自分の表現を他人の表現と並べて客観的に鑑賞し、つぎへの努力目標を立てねばならない。これがうまくできないと、自己満足のいたずら書きのようなものが残るだけになる。先人たちの作品に深い理解を持ち、それらの中で自身の作品を厳しく見つめることが出来る芸術家こそ、後世に残る作品を生む資格がある。

大作曲家といえども、音楽評論家も兼ねていたわけではないから、他の作曲家の作品をどのように感じていたかを知るのは難しい。それでも、評論活動をよくしていたシューマンのシューベルトのハ長調の交響曲に対する批評を読むと心酔の度がよく分かる。

この交響曲にはただの美しい歌とか、今まで音楽が幾百回となく表してきたありふれた音楽といったもの以上のものが秘められていて、聴く人を今までいつかきいたことがあるとはどうしても思えないような、或る国につれていく。(シューマン著・吉田秀和訳「音楽と音楽家」岩波文庫より)

この交響曲は後に「グレート」と呼ばれるようになり、シューマン自身も何度か用いた「天国的に長い」という表現は今もよく用いられている。

鑑賞力そのものは訓練によって身につくものとは言い難い。鑑賞力を高める教育カリキュラムがあるとは思われない。しかし、よい評論は読者に新たな視点を与えるに違いない。生きるための技術の継承のための教育を超え、文化の継承は評論活動が担っていると考えられないだろうか。

本稿は故・古田秀和氏と親しかった某氏から遺稿としていただきました。感謝に堪えません。(編集部)

新譜 月評

2 0 1 4
4.

交響曲 宇野咆吼
管弦楽曲 藤田由々
声楽曲 北海又帰

4月号新譜月評

■ベートーヴェン 交響曲第三番「英雄」

安倍三振指揮

■ムソルグスキー ドロチノフ編 管弦

楽曲組曲「展覧会の絵」

ドロチノフ指揮指揮

■「ふるさとを愛す」世代をこえた愛唱

歌集

初穀糟人指揮

一時期頻繁に常任指揮者の交代があった永田町管弦楽団においては長期の在任になった安倍の「満を持した」ともいふべき演奏である。この録音にあたっての安倍の意気込みは相当なもので、収録前日には靖国神社に参拝し、名演を祈願し



■ベートーヴェン 交響曲第三番「英雄」

安倍三振指揮 永田町管弦楽団

たという。

ベートーヴェンになぜ神社なのかという問いかけには、「英雄」の第三楽章は葬送行進曲であり、戦争で命を落とした英霊に思いを馳せることはよい演奏を願う者にとって当然の行いであると安倍はい

うが、ナポレオンと何の結びつきがあるのか、理解に苦しむ。

用いられている楽譜は永田町管弦楽団で代々用いられている版を使っている。ただし、発想記号などの解釈にかなり変更があるようだ。全体の印象は在来オーケストラを基準にすれば復古調の、ペリオド楽器による表現に近い。ならば、こちらの版を採用して演奏すればいいのと思うが、譜面の変更には団員の三分の二以上の賛成が必要なので、今回はとりあえず解釈の変更で対応しようだ。

演奏は自信に満ち、迫力があるようだが、やりたいことがすべて表現されているとはいえない。これからが安倍らしいフレーズという箇所でブレーキをかける

パートがある。その結果、伝統重視の鈍重な表現に近くなってしまうのだが、暴走によってアンサンブルが崩壊するよりはまだましかも知れない。

最大の難点は、ソロが出てくるパートの奏者の技量不足がある。曲の構成をわきまえない勝手な演奏はプロのなせる技とはいえない。いずれの奏者も正式なオーディションを経て採用されたメンバーではなく、指揮者の個人的つながりで採用されたという。お友達オーケストラの押しつけはごめんだ。

噂では、あるトップ奏者だった団員はこの人事に抗議して「彼も権力が欲しかっただけの男だ」と楽譜を破り捨てて退団したという。今後に関問題を残す。

「展覧会の絵」の原曲はムソルグスキー作曲のピアノ曲。現在は管弦楽編曲版が広く聞かれていて、ラヴェルの編曲による版を筆頭にいろいろな作品がある。ここで演奏されているのはウクライナの作曲家・指揮者のドロチノフによる編曲版

展覧会の絵



■ムソルグスキー ドロチノフ

編 管弦楽組曲「展覧会の絵」

ドロチノフ指揮 キエフ
交響楽団

で、以前からキエフ交響楽団で用いられていたヤナーコビツチ版の改定版である。常任指揮者が変わることにより編曲を改定していく慣習の根底にはロシア、オーストリア、ドイツなど近隣諸国との度重なる紛争がある。ロシア人作曲家のムソル

グスキーの音楽を素直に受け止められず、自分たちの音楽を取り入れて演奏したい、そんな願いがあるのかもしれない。幾重にも改定を重ねられた編曲版だが、原曲の魅力は失われずに残っている。

第2曲の「古城」は楽器編成を最小限にし、哀愁の旋律が美しい。過去の多くの戦乱で命を落とした兵士たちを偲ぶかのように、どこか日本の「荒城の月」を思わせる。

第4曲の「ビドロ（牛車）」は原曲通りのフォルテッシモで始まる。多数の打楽器を加えた重量級の行進曲といえようか。ロシア軍の戦車隊の進入を想像した。

第6曲の「サムエル・ゴールデンベルクとシュムイレ」は堂々とした金持ちと

卑屈な貧乏人を対比させて描いた音楽だが、ここでは戦場のよう。紛争がある度に過激な表現になっていったのではあるまいか。

圧巻はやはり終曲の「キエフの大門」。この曲があるゆえにウクライナで「展覧会の絵」の演奏が引き継がれてきたといつてよいだろう。ムソルグスキーが作曲した当時この門は計画段階であり、結局建設されなかったが、もし建設されていたら国民的シンボルとなつたろう。その願望がにじみ出るかのような熱い想いが演奏に込められている。

ディスクの販売ルートはまだ決まっていないが、国際問題を離れ、広く世界の愛好家に広めたい名盤だ。

組織のトップに問題のある人間を抱えながらも企画はまともだったと胸をなで下ろすディスクだ。ただし、断っておくが「今のところは」である。NHKには首相のお友達として従軍慰安婦肯定、テロリスト賛美、戦争美化と、どう見ても



■「ふるさとを愛す」世代をこえた愛唱歌集

榎戸 精人 指揮 東京放送合唱団ほか

大半の国民の意識からかけ離れた歴史認識を持つ人間が送り込まれた。今後傘下の会社も含め、TV番組を始めとする表現にいつ口を出されるか怯えていかねばならないのではないか。放送法により番組内容に口を出せないのが遵守されるな

ら、異様な人事をする意味がない。魂胆が見え隠れする。

このディスクには明治時代から現代まで学校教育の場で歌われた歌曲が収められている。おおむね年代順に並べられ、時代背景についての数行の解説が歌詞とともに添えられている。最後は震災の被災地で多くの人たちが涙した「ふるさと」。

解説自体には特に右寄りの感をいだかなかったが、気になるといえば選曲だ。戦中よく歌われたものの、戦後は軍歌として封印された曲が2曲含まれている。うる覚えだが、軍歌の放送に関してはガイドラインがあったはずだ。

(1) ドラマ中のラジオの音声と分かるものの。

(2) 放映している映画のテーマ曲。

(3) 演じる俳優のセリフとして一部が歌われるもの。

つまり軍歌放送三原則である。これがいつの間にか緩和されてはいまいか。

無論、家族の事を思いつつ自ら命を捧げることや愛する人との別れの感情は戦争であろうと災害であろうと普遍的なものであるとの意見はあろう。しかし、避けられない天災にまつわるドラマと人の心の闇が起こした戦争の悲劇を同列に扱うのには違和感を感じざるを得ない。

軍歌の中には純音楽的に価値がある作品がないとはいえないが、音楽が歴史を美しく包んで風化させる行為の片棒を担ぐようになって欲しくない。

2050 年、西之島は東京都の大きさまで成長します



ここに村を興しましょう。名付けて新双葉町。今、
帰還困難区域過から避難されている福島県の方々の
新天地ともなり得る漁業と観光の町です。

協賛金（3%）付きの海にちなんだディスクを続々発売していきます。
第 1 回目はドビュッシーの「海」、第 2 回目はイベールの「寄港地」。

温暖化による海面上昇などで島が消
えた場合、協賛金は返却しません。

復興省音楽課

どんな大家も始めは模倣から



当研究所が開発した論文コピー検索システムを応用、名曲として知られた大家の作品の類似度を独自の数学理論で算出、メドレーで再生します。独創性がないとあきらめて落ち込んでいる方のための癒やしの音楽です。

偽科学研究所

速報！

不要CDが世界を救う？

海外メディアも注目の

プラスチック処理方法を発明

コンパクト・ディスク（CD）が登場してから30年余、膨大な枚数のディスクが出回った。しかし、ほとんどが消費者の一過性の楽しみのために使われ、短い時間で廃棄される。いまや廃棄物としても無視できない。不要CDを環境保護のために使おうという試みはいろいろ行われたが、決定打はなかった。

このような状況の中、都内のホテルで行われた不要CDの処理方法の発表は注目を浴びた。CDを環境に悪影響なく処理するばかりでなく、

地球温暖化の原因のひとつとされる二酸化炭素を吸収する物質となるという。まさに、これまでの概念を覆すといっても大げさでない発明である。

処理の大きな流れは左の写真のように3段階に分かれる。まず、ディスクにレーザーを使って赤外線を照射する。実はこの処理はCDプ

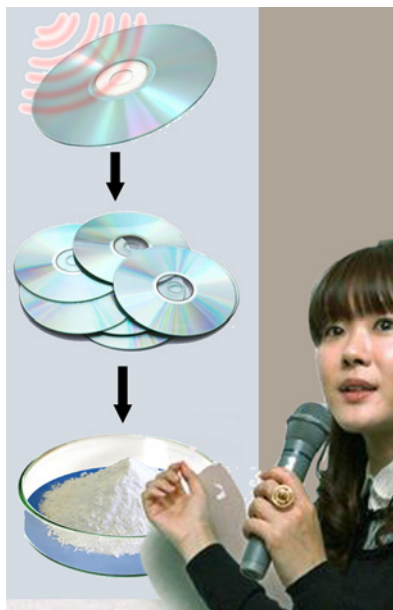




Fig. 1

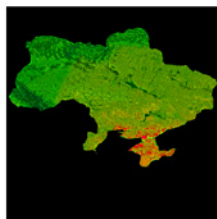


Fig. 2

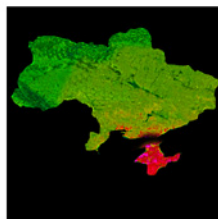


Fig. 3

レーヤーにかければ必ず行われるので、いったん再生したディスクに対しては省略できる。つぎに、このディスクを集め粉碎し、粉末を弱い酸に漬け3日間放置する。

放置したあとの粉末にわずかな電流を流す。すると、上のFig. 1から3に示すようにマイナス極に近い粉末が周囲にある二酸化炭素を吸収し始める。下方右に赤で示す領域である。

子細な分析を行った結果、赤で示された領域の粉末には栗宮核と呼ばれる二酸化炭素由来の結晶が生まれていて、分離して封止後、地中など安定した環境に廃棄することができる。大規模に行えば温暖化防止どころか世界を冷やしかねないほどの現象が起こる。発明者は若い女性をリーダーとするグループで、工業化にはオントモ燃処理(株)が乗り出している。まずは発表の追試を待ちたい。

地球環境の改善に協力しましょう

不要CD 5枚を本券に添えてお持ちの方に割烹着を進呈

オントモグループ **オントモ燃処理**株式会社

有効期限 2014.4.1

やがて、こんな「喋々さん」のディスクは
国内では手に入らなくなるかも知れません。



政権寄りの人材による団体「新しい音楽教材をつくる会」によれば、プッチーニの歌劇「マダム・バタフライ」の脚本は自虐史観に侵されていると主張。今後国内での公演は改訂版の脚本によらねばならぬこと、喋々夫人を演ずる歌手は必ず日本国籍を持つことを法制化することを求めています。

やがて鑑賞はもとより、ディスクを持っているだけでも罰せられる時代がやって来たとしても、生き残る名演を今すぐあなたのものにしておきましょう。

鑑賞の自由を守る会

放送法違反・報道への政治介入



行使された場合、N響演奏会を始めとするNHK
ホールでの公開収録を無観客にして抗議します

NHKから国民を守る会

レコード軽術常備店



クラシック音楽を聴きながら

語らいと酒悦のひとつき

〒167-0054 杉並区松庵 3-38-3

ニューダイヤハイム B 1 南号

☎ 03-3334-4161 (日曜休み)

小冊子を集めた展示会 Zine 展に出展しました



Zine展@銀座モダンアート

銀座モダンアート

〒104-0061 東京都中央区銀座 1-9-8 奥野ビル 608

<http://www.ginzamodernart.com>

info@ginzamodernart.com

TEL/FAX: 03-5579-9830

編集後記

今年になって騒がれたのは二つの偽物事件。浮かぶ案はどうしてもそちらの方へ傾きがちで話題を広げるのに苦労しました。意識して楽しい偽物を作るのがパロディと思っていますが、根は共通なんですね。

バックナンバーのハイライト、真面目なエッセイなどを
http://members2.jcom.home.ne.jp/s_yanagawa/
で見ることができます。

レコード軽術 '14 年春号（通巻第 52 号）

2014.4.1 第 1 刷発行

編集発行人 柳川誠介

〒 195-0054 町田市三輪町 539-119

TEL&FAX (044) 989-8510

s_yanagawa@jcom.home.ne.jp

印刷・製本 家内工業

